

令和4年度 四国ブロック保育研究大会まとめ

すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして

と き 令和4年7月5日（火）

ところ 高知県立県民文化ホール グリーンホール 他

高知県保育所経営管理協議会
高 知 県 保 育 士 会

基調報告

○ 全国保育協議会 会長 奥村 尚三

○ 全国保育士会 会長 村松 幹子

【基調報告 I】

「全国保育協議会の取り組みと制度動向への対応」

全国保育協議会 会長 奥村 尚三 氏

子ども・子育て支援新制度による教育・保育施設をとりまく課題と対応についてのパンフレットから主に新型コロナウイルス感染症への対応、児童福祉法等の一部をめぐる改正について、「こども家庭庁」の設置について、人口減少社会における保育課題について、保育士・保育教諭等の人材確保に向けた処遇改善の推進、令和5年度保育関係予算・制度等に向けた要望について説明された。

【基調報告 II】

全国保育士会の取り組みについて

全国保育士会 会長 村松 幹子 氏

はじめに、全国保育士会の組織の成り立ちとして、「保母会」から始まり「全国保育士会」に至るまでのあゆみや、専門職として社会的位置づけを得る為資格制度拡充に向けた活動、国家資格化に向けた取り組み、主任保育士配置へ向けた取り組みといった制度的課題解決に向けた取り組みについて、また「全国保育士倫理綱領」をもとにした活動についての説明がなされた。

そして、保育を取り巻く施策等の動向については、法律関係の内容ではありますが、「児童福祉法等の一部を改正する法律」「こども家庭庁設置法」の可決、成立について、保幼小の連携強化に向けた「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会における検討、「教育職員等による児童生徒性暴力等の防止等に関する法律」の公布について、保育士の観点で気づいたところをピックアップして話された。

最後に、令和4年度の全国保育士会の取り組みについては、2030年までの10年間においてSDGsの考えに基づき、「全社協福祉ビジョン2020」を踏まえた行動方針について4つの柱に沿って、取り組む事業内容についての説明がなされた。

第 1 分科会：高知会館（白鳳）

【カテゴリー 1】子どもの育ちを保障する

[研究テーマ①]

新たな時代の保育実践 ～すべての子どもにむけて～

発表者 高知市立秦中央保育園 保育士 桑名 白貴

[研究テーマ②]

配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて

発表者 香川県白樺保育園 主任保育士 八十岡 美智子
(保育士 佐藤 千賀・・・欠席)
事務長 白石 真希 (Pc 操作)

[研究テーマ③]

保育者の資質向上を図る

発表者 愛媛県みしま保育園 副園長 清水 志津子
チムリタ吉元 リエ (Pc 操作)

助言者 高知大学 教育研究部 人文社会学科系 教育学部門
教授 川俣 美砂子

司会 高知市保育幼稚園課 管理士官保育担当
係長 津田 志保子

幹事 高知市朝倉中央保育園 園長 岸本 章子

記録 高知市立愛善保育園 園長 明神 望
朝倉中央保育園 主任 吉良 和恵

【カテゴリー1】子どもの育ちを保障する

【研究テーマ①】 新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～

発表者 高知市立秦中央保育園 保育士 桑名 白貴

《発表内容》

令和2年度より特別支援加配保育士となり、各クラスやそれぞれの子どもの状態に合わせて支援に入りながら一人ひとりの子どもの姿を把握していく。しかし、特別支援加配保育士として、少しでも子どもたちや担任保育士が安心して過ごせることができるようにと心がけながら支援をおこなってきたが、支援に入るクラスが偏りがちになってしまうこともあり、園全体の様子を把握することは難しく、クラス担任の保育の妨げにならないようにどう支援していけばいいのか悩んでいた。そこで、支援確認票を作成し、それをもとに職員間で話し合いながら、必要な支援や関わりについて考えていく。クラス単位でじっくりと話し合い、それぞれの子どもたちにとってどのような支援や関わりをしていけばよいのかひとつずつ整理し考え合いながら支援内容を見直し、特別支援加配保育士の動きについて再確認する。子どもにとって今何が一番大切なのか考えながら支援し、時には子どもからさりげなく離れ見守る支援も必要であり、子ども一人ひとりの発達段階を見極め、それぞれに合った支援をおこなっていく必要がある。支援確認票をとおして子どもの姿を園で共有し、子ども理解がより深められ、園全体で見守り支援していこうという共通認識をもつことができた。そして思いに寄り添いながら子どもとの関係を深め、全職員で一貫した支援をおこなうことで、子どもにとって安心できる大人の存在が増える。クラスの垣根を越え、子どもがあそびたい場所でやってみみたいことができることが自信につながるのではないかと思う。

近年、特別な支援を必要とする子どもたちが増えてきている中で、特別支援加配保育士は責任のある重要な仕事であると思う。特別支援加配保育士だからこそ見えてくる子どもの姿や担任には届きにくい声を見逃さず、子どもの変化に気付いていく。そして子どもたち自身が自己肯定感を高め、周りの人との絆を感じながら安心して生き生きと過ごせる場になれるよう、担任と連携しながら園全体で子どもたちの支援をしていきたいと思う。という報告であった。

《質疑応答》

(質疑) 高知市一宮保育園 大野先生

支援確認票は、いつ頃作成し、再確認やどのように変更しているか教えてほしい。

(応答)

昨年度は7月頃に作成し、職員会等で報告。その後、パートさんにもわかるようファイルにして回覧し、園全体で共有した。今年度は5、6月頃に話し合いをして作成し、これから共有していく。

【研究テーマ②】 配慮を必要とする子どもや家庭への支援に向けて

「共に育ち合う環境の中で心もちに寄り添って」

～子ども一人ひとりのまあるいたネをそだてよう～

発表者 香川県白樺保育園 主任保育士 八十岡 美智子
保育士 佐藤 千賀

《発表内容》

支援を必要としている家庭を対象に、共感的自己肯定感を高めるための関わり方や支援の方法を探ることを目的として、月1回の「ケース会議」と「おはなし会」の場で情報を共有し、理解を深め、支援方法について考え意見を集める。

まず、気になる子どもや保護者の情報交換をして、職員全体で共通理解をするため、ウェブマップを作成する。そして1枚の写真をもとに、その時の子どもの感情、保育者の接し方や支援方法について話し合い、実践し考察する。ひとつひとつの事例に対して、職員間で意見を出し合うことで、いろいろな方法が考えられる。また、担任だけでは行き詰っていた気になる子や周りの子、保護者への配慮も他の保育者からの違う視点と考察により、配慮が広がり自信をもって関わる事ができる。事例をもとに職員間で話し合い、ひとつずつ実践し、支援していく事で、対象児や保護者に変化がみられてきた。

という報告であった。

《質疑応答》

(質疑) 助言者 高知大学教授 川俣 美砂子先生

月1回のおはなし会は、どのくらいの時間をかけているのか教えてほしい。

(応答)

時間がかかることもあるが、毎月第1土曜日の午前中を予定している。

(質疑) 司会 高知市保育幼稚園課管理士官保育担当 係長 津田 志保子さん

ウェブマップ作りは、具体的にどのようにして作成し、それを作成することによって見えてきたものについて教えてほしい。

(応答)

ウェブマップは、担任が中心となって保育園での生活の様子を記入していき、おはなし会等で他の先生から不足分を追加してもらう。職員全体で作成するウェブマップによって、ひとりひとりの育ちが見えてきたと思う。

(質疑) 高知市春野弘岡中保育園 伊藤先生

保育の中で気をつけていること、関わりについて教えてほしい。

(応答)

ウェブマップにより、先入観をもたずありのままの姿を受けとめ、その子にあった対応が大切であるということ園全体で共通理解し、保育の中でも活かせるように気をつけている。

(質疑) 東秦泉寺保育園 寺坂先生

支援が必要な子どもや、保護者に対しての配慮など、どのくらいの規模で家庭支援を進めているか教えてほしい。

(応答)

接するのは主に担任だが、前の担任や園長、主任など他の職員も会った時に声をかけていくことを心がけている。

[研究テーマ③] 保育者の資質向上を図る

発表者 愛媛県みしま乳児保育園 副園長 清水 志津子

チームリーダー 吉元 リエ (Pc 操作)

≪発表内容≫

四国のまんなかと言われる四国中央市は、「めざせ！子育て環境四国一」をスローガンに、子育てに優しい様々な取り組みを行っている。四国中央市のまんなかにあるみしま乳児保育園は子どもたちが安心して過ごすことができる保育園を目指し、子育ての主役は親、「子どもがまんなか」を基本に子どもたちが心身ともにすくすく・のびのびと心豊かに育ち、「笑顔いっぱい」に過ごせる保育を行うためには、保育者の資質の向上が重要だと考えた。新任職員3名が加わり、どうやって園を盛り上げていくか。保育者自身の意欲・毎日が楽しい！がんばろう！と思える雰囲気作り、職員とのコミュニケーションを大切にしようと、副園長・主任・フリー保育士が連携を取り、園全体で取り組んできた。

4月、副園長・主任・フリー保育士等、今まで以上にクラスに入り、職員からの相談など不安な気持ちを受け入れ、職員に寄り添い一緒に考え共に保育してきた。また職員の意欲が高まるような伝え方を意識し、思いを伝えている。

○職員研修(初任者研修)OJT<オン・ザ・ジョブ・トレーニング>の取り組み

新任職員が安心して保育のスタートができ、力を合わせて頑張れるようそれぞれの新任保育士に担当の先輩保育士を決め、一緒に保育をする中で、相談にのったり指導・アドバイスをしたりすることができるようにしてきた。1週間ごとに振り返り、思ったことや気づいたことなどを研修ファイルに書き、担当の先輩保育士がコメントをつけ、アドバイスしている。新任保育士は、「眠たい子のそばに行き寝かせようと近づくと泣かれてしまう。」など悩んでいることを伝えたことで、先輩保育士から「子どもと一緒に遊ぶことから始めてみる？」等アドバイスを受け、子どもと一緒に遊び関係性を作っていった。ケガやトラブルばかりに意識が向いていたが、子どもたちと関わることの楽しさや今日も楽しかった。明日も頑張ろう！という気持ちもでてきている。

○園内研修

園内研修では日々の保育の中で自分たちが大切にしていることや、保育を振り返っての課題を明らかにしている。言葉の影響力、子どもへの言葉がけの大切さでは、(プラスの言葉)どんな言葉をかけたら自分が心地よいか。マイナスの言葉も考え、プラスの言葉を意識す

る。また子どものすることや言うことを否定的にとらえないなど、大切にしないといけないことを出し合い、会ごとに記録や感想を書き回覧し、全職員に周知している。また、24時間を視野に入れた保護者のおたよりノートを作り活用もしている。保育園の遊びや様々な姿、家で子どもたちの生活を把握でき、保護者との信頼関係を作るツールの一つとなっている。コロナ禍で、対面でのやりとりが限られている為、おたよりノートの大切さを感じている。保護者との関係を築くやりとりができるよう書き方（伝え方）などの研修など、身近な題材で話し合い、職員全員が共通認識をもって同じ方向を向き、園内研修の充実に取り組んでいる。

○人権・同和教育研修への参加

四国中央市で行われる人権・同和教育研修にも積極的に参加し、人権の正しい知識を学んでいる。保育園という場が子どもにとっても保護者にとっても初めての場であり、人的環境は重要である。その為には、保育者自身の質の向上が大切だと考える。

○リモート研修の参加

新型コロナウイルスの影響により、様々な研修がリモート研修となる。リモートとなった1年目は研修を受ける環境が整備できてなかった為、参加できなかった。研修の大切さを改めて感じ、環境を整え昨年度からリモート研修に参加している。個別で受けていたが、今年度は誰かと共有しながら受けることができるようなリモート研修も計画している。園で受けることができるので、子育て中の職員も研修を受けやすいというメリットがあり、積極的に取り入れていきたい。

○自己評価

職務内容や立場に応じて内容を変えた自己評価を年3回行っている。一人一人の思いや気づき、園としての改善点はないかを分析している。保育者等の自己評価が保育園の評価につながっていく為、年間を振り返り、課題を出しながら次年度につながるようにしている。

○実践の成果

新任保育士自身が分からないことが分かっていないのでは？困っていることはないか？など、サブリーダーがサポートし、不安な気持ちに寄り添っていくことで、同じ時間を共有し、話すことも増えていった。保育の様子や職員の事を知ることができつつある。職員一人一人の長所を活かせるような場の提供を行うことができたことで、「次はなにをしよう」「こうしたい」という意欲につながってきている。また職員の思いや考えを聞いて一緒に考えるようにしてきたことで、職員から主体的な考えがでるようになってきた。新任研修では、担当保育士を決めることで、誰に聞いていいか分からないという不安が解消され、先輩保育士も担当する保育士のことを気に掛ける姿があり、関係を築いていくことができつつある。研修ファイルでは、先輩保育士とのやりとりの中で元気づけられ、また頑張ろう！と思えている新任保育士の声が聞かれ成果を感じている。また、先輩保育士も新任保育士への指導や伝え方など考え工夫し自分を振り返り、保育士としての力量も高まっている。OJTの取り組みを見て自分もしてみたいという声などもあり、園全体が意欲的な雰囲気

になっている。

○今後の課題・展望

研修等で保育の質を向上させる手段はあるが、園の良さ・課題を明確にし、自己評価とのずれがないかの確認ができるよう第三者委員会の導入を考えている。

副園長として工夫しながら、より一層保育室に入ることを心掛け、声がけにかたよりがないう主任保育士と協力していきたい。職員同士が互いのこと・子どもの事ことをよく知り、理解し、「こどもがまんなか」の保育実践の充実を図っていきたい。保育者の資質を高めることで、保育園の質を高め、地域に愛される、子どもも保護者も職員も笑顔いっぱいの保育園でありつづけたい。

《質疑応答》

(質疑) 助言者 高知大学教授 川俣 美砂子先生

24H視野に入れたおたよりノートとはどのようなものか？

(応答) 副園長 清水 志津子先生

食事マーク・お風呂マークなど、生活の時間が分かり、自宅に帰ってから保護者が記入。園と保護者との交換日記のような情報を共有できるノートである。土日など記入がなかったりする時もあるが、全家庭、通常毎日記入してもらっている。

(質疑) 若葉保育園 飯田保育士

初任者研修や、新任保育士育成のために一緒に保育しながらということであるが、以前は、正職員の新任保育士とベテラン保育士とで担任ができる状況であり、新任職員もベテラン保育士の保育を見て学ぶことが多かったが、現在自園なども、新任の正職員が保育の仕方が分からないまま主でクラスを運営し、複数担任であっても新任職員が主で引っ張っていかなければならない状況である。みしま乳児保育園での職員配置はどのようになっているのか。

(応答) 副園長 清水 志津子先生

新任保育士が配属されたクラスは、サブリーダーの立場の職員にまかせている。同じクラスにサブリーダーをつけている。

(質疑) 若葉保育園 飯田保育士

サブリーダーは正職員か？

(応答) 副園長 清水 志津子先生

正職員とは限っていない。臨時職員がサブリーダーにもなっている。

◇3 本の実践発表を通しての助言（講評）助言者（高知大学教授 川俣 美砂子先生）

①新たな時代の保育実践 発表者 高知市秦中央保育園 桑名 白貴

《助言》

支援確認表は細やかな対応が可能になるすばらしい表である。この表を広めるためにも、いつ、誰がみても理解できるものになるとさらによい。

- ・書き手の心情を入れずに記録する。
- ・過去・現在・未来が分かるよう区別する。
- ・主題が誰かを明確にする。

「大切にする」「寄り添う」など使いがちだが、具体的にはどうするのか。

必要なシーンや関わり方法（本児の気持ちを考えながら）（表情を確認したりしながら）など後で見たときに分かりやすいように記載するとよい。主語がはっきりなっているとなおよい。

特別支援加配の保育士は子どもの安心感が増すだけではなく、担任としても安心できる存在であると言っている。加配保育士の関わりは、これから先、自分で生きていくために、子どもが自分で気づくことができる関わりを大切に、影になりひなたになり、支えてくれているありがたい支援である。

②「共に育ち合う環境の中で心もちに寄り添って」

～子ども一人ひとりのまあるいタネをそだてよう～

発表者 社会福祉法人 白樺保育園 主任保育士 八十岡 美智子
保育士 佐藤 千賀

《助言》

配慮が必要とする子どもや家庭への支援に向けて（インクルーシブ保育）

・現在は、本来の意味のウェブマップではないかもしれないが、子どもの育ちやものごとの関係性がしやすい。

・時計カード・持ち物カードなど、子どもが楽しく親しみをもって活動へ迎える工夫がある。

子ども一人ひとりのまあるいタネをそだてよう・・・多様性から学ぶ、統合保育の考え方
インクルーシブ（一人ひとりちがう）保育の考え方とは、すべてをつつみこむ保育である。

○配慮を要する自分である虹色で例える特性

- ・私たちは誰一人として同じ虹色の配合ではない。
- ・子どもの虹色の特性も一人ひとり異なる。

その特性を理解し合理的配慮を的確に行うこと・違いを強みとしていかに活かせるかに寄り添うことが保育士の役割である。

保育士も保護者も誰もが配慮を要する自分であるという当事者からの視点を持てると、配

慮を要する子の理解ができる。

③「保育者の資質向上を図る」

発表者 社会福祉法人伊予三島福祉施設協会みしま乳児保育園
副園長 清水 志津子

《助言》

○保育士同士の配慮としての手立て

- ・育ってきた社会的背景の違いを考慮する
- ・得意分野を伸ばす（得意分野のリーダーに）
- ・苦手分野を育成する（得意な人に教えてもらう）

実行できない姿に対しては、できないのはなぜか。なぜ困っているのかなど不安や戸惑いの感情・環境の要因を考えてみる。

メンターをつける（指導者・相談者）気が合わなくてもあたりまえである。

新任の先生と気が合わないこともあるので、副メンターもつける。

研修ファイルへのメンターとのやりとりでは、メンターのコメントは書きすぎないようにしたほうが良い。どのメンターも同じ量のコメントが書けるのかなど、メンターの負担になることもある。メンターの負担にならないようにしていく。

保育者はこうあるべきなど、規範論や人格論では不十分であり、資質能力も多様化している。

無意識に保育者に有能であることを求める為、よかれと思って指導することでも、相手が傷ついてしまうこともある。どうすればよいのかをチーム全体で考えていく必要がある。

○保育の質を高めるチーム作り

100点満点とはいかなくても、合格点に近づくようにつみあげていく

- ・保育者の不十分を嘆くより、成長を望む
- ・組織が育ち、保育者が育ち、子どもがよりよく育つ
- ・保育の楽しさを共有し、子どもの成長を喜び合う
- ・園内・園外の研修の必要性を考える（やりくりしてたまには外に出る必要性）
- ・園行事や活動のねらいを再考

（コロナ等で縮小したりしていることなど、行事の見直しをする）

インフォーマルの隙間時間にコミュニケーションを大切にする。全職員に声をかけあってほしい。コミュニケーションがとれていない時に子どものケガが多いと感じる。

○本大会の主題である、「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現を目指して」保育・子育て支援関係者は保育の営みの大切さを社会にアピールする必要がある。

それぞれの発表を通じて、交流やヒントになったことと思う。職員同士、全体の情報共有の大切さを感じた。

第2分科会：高知会館（飛鳥）

【カテゴリー2】子育てライフを支援する

[研究テーマ④]

地域の子育て家庭への支援の充実にむけて

発表者 高知県あざみの保育園 副園長 山本 由美
子育て支援担当 野口 笑美
子育て支援担当 山本 美智

【カテゴリー3】多様な連携と協働をつくる

[研究テーマ⑤]

子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク

発表者 徳島県さくら保育園 主任保育士 一柳 諭史
主任保育士 森本 結香
保育士 唐谷 絵里衣

助言者 高知学園短期大学 幼児保育学科長 教授 後田 紀子

司会 高知市十津保育園 園長 森本 佐和

幹事 高知市 ひなぎく保育園 園長 山崎 雄一郎

記録 十津保育園 主任 中川 夏恵
城南保育園 保育士 小川 和紗

第2分科会 カテゴリ2 子育てライフを支援する

研究テーマ④：地域の子育て家庭への支援の充実にむけて

【発表者】 高知市 あざみの保育園 副園長 山本 由美
子育て支援担当 野口 笑美 山本 美智

・発表の主な概要

あざみの保育園は地域子育て支援センターたんぽぽと併設されている。コロナ禍により利用者が減った中、ZOOMおしゃべり会や電話相談などで繋がりが途絶えないようにしてきた。電話相談はあまり利用がなかったが待っているだけではいけないとこちらから電話をかけると利用者からは「話がしたかった」という反応があった。また、利用者から施設の情報発信をして欲しいという声がありInstagramを開設したところイベントや施設の情報を届けやすくなり、新たな利用にも繋がってきている。

コロナ禍な事もあり保育園と支援センターとで職員同士の交流が少なく互いの情報共有が不足しているという課題も見えてきているので、利用者同士を繋ぐだけではなく園と支援センターも繋がっていかねばならないと感じている。

・あざみの保育園質疑応答

Q：連携不足をどういうところで感じる事がありましたか

A：入園する時に、知っている家庭については引継ぎができていたが、全体を把握できていたわけではなかったのもっとできていればよかった。コロナ禍前は園の方から支援センターに行くことがあったが少なくなっている。With コロナをしつつ連携を取って一緒に支援していきたいと思う。

Q：保護者の悩みで相談の件数が多かった事はどんなことでしたか？

A：離乳食の悩みや就園先についての悩みが多かった。また県外から移住してきた方で遊びに行く場所や出かける場所にどんな所があるかについての相談を受け、他の施設の紹介や情報提供をする事もあった。

【助言者】 高知学園短期大学 幼児保育学科 教授 後田 紀子

・電話に抵抗を感じる方が多く、相手からかかってくることで安心するという姿は大学でも明らかに感じている。発表を聞いて待っているのは駄目なんだということを痛感した。
・子どもとの関りや不安を発信出来ず自分の内に秘めてしまう事もある中で、声をかけてもらって自分の思いを聞いてもらえる人が近くに居ることが心強いのではないかと思う。
・子育て支援センターの名前をサロンと変えて行きやすくしたり、保健師が関わりを持っているところもあつたりと全国で支援センターの展開を各自工夫している。あざみの保育園でも地域にとってどういう子育て支援のあり方かを考えてやっている事が伝わってきた。

カテゴリー3 多様な連携と協働をつくる

研究テーマ⑤：子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク

【発表者】徳島県 さくら保育園 主任保育士 一柳 諭史 森本 結香
保育士 唐谷 絵里衣

・はじめに

研究発表に取り組むにあたって、テーマを決めようということになり、話し合いをする中で、2つのテーマが出ました。1つはさくら保育園は住宅街の中にあり、周りに自然環境が少ないことや、近くに低年齢クラスが散歩に行ける距離に、自然と触れ合う場所がないということで、自然環境の見直しを行いたい。もう1つは住宅街にあるので、自然環境が少ない分、近くに老健施設、小学校、幼稚園、児童館、公民館、神社などの施設は沢山あり、交流やイベントの参加を積極的に行ってきました。そこで自然と地域交流、関係機関との連携、この2つを柱として研究に取り組もうとしたところ、コロナ感染が広がり、交流が全部中止になってしまい、地域との交流が難しいのではないかとということで、家庭も地域という風にとらえ、自然環境の改善に保護者、家庭を巻き込んでしようと計画を進めてきました。

・さくら保育園質疑応答

Q：アンケート結果についての質問ですが日々の会話や、つぶやきの内容から保護者と子どもと一緒に自然と関りを楽しんでいることが感じられるという部分ではどのような会話やつぶやきがあったのか、お聞かせください。

A：家庭でのつぶやきなどを、保護者の人が記入して、つぶやきポストというものに入れるようになっていきます。最初は入れる人も少なかったのですが、活動をはじめて、親がパネルを見たことで、会話が生まれていて、それに対する子どものつぶやきというのが、ポストに多く入るようになりました。例えばカブトムシの幼虫を家に持って帰って一緒に飼育した保護者からは「子どもが毎日カブトムシの様子をまだかな、まだかなと言いながら眺めています」というのがつぶやきポストにはいつたりしました。

Q：園の取り組みを保護者に広げていくのはなかなか難しいと思うんですが、広げていった中で、園として工夫した点を教えて頂きたいのと、心に残っているエピソードをもう一度お聞かせいただければと思います。

A：研究発表に取り組むにあたって、全職員で取り組みたいという思いがまず出ました。29名の職員が全員集まって話をする中で、みんな意見はあったんですが、大人数の中で意見を言える職員が少なかった。特に経験年数の若い先生は遠慮して言えないということがあったので、いいアイデアを持っているのに、どうにかして出せないかと思い少人数のグループにして意見を出し合ってから全体の話し合いにもっていくのがいいのではないかとということで、5つのグループに分かれるようにしました。お散歩チームであればお散歩マップをつくったり、視覚的にわかるようにしました。エピソードとしては見つけた幼虫を世話する中で虫が苦手なお母さんも一緒に興味を持って、世話をを行い、無事に孵化したことで、その時の感動を子ども、保育士、保護者で共有でき、三者が一つになれた経験がありました。

【助言者】高知学園短期大学 幼児保育学科 教授 後田 紀子

まず、なぜ自然体験が必要なのでしょう？自然体験をするのでしょうか？
今回ほんとに大事なんだなと思ったのは、先生と子どもだけでなく、保護者の方をどう巻き込むかがとても重要なことで、スタートが親御さんからの自然体験が少ない、から始まっている、じゃあ自然体験でなんで必要なんですか、そこが園側のスタートになっているのかな、先生方のポイントとしているのが、五感という感覚機能の部分をポイントとされていました。やはり一つ一つが切れるのではなく全部つながっていくという、例えば腐葉土は、ホームセンターで買うという認識ですが、作っていくその過程で材料から幼虫を発見します。なんでこんなところにいるんだろう？そこに五感が出てくると、今度問題解決学習能力、なんで虫がいるんだろう、栄養があるからだ、そこに一つの連続性があります。それから「きもちわるいね、かわいいね、ちいさいね」という感情的な部分、発想力であったり、環境の部分で、そこが芽生えてくると今度は小さいものに対して力を加減して触ってみる、そこに感触であったり小さい生き物に対しての関りを学んでいく。今度靴を履いて葉っぱの上を歩いた時にどんな感触をしているかな、そこに身体機能というものが、実は自然体験の中に隠れています。一つの活動を通してながれになっていますよ、というところをおとしこんでいくというのも、活動をする中で重要な部分なのかな。
資料63ページで真ん中のところを顔を使った自然体験という表現をされています。これはこれで、十分なのですが、別の言い方を私がさせていただくとあの自然体験を通して一つ目に五感という感覚機能、身体機能、問題解決能力、発想力に置き換えることもできるかなと思いました。

【感想】

・コロナの中でも出来ることを考えて、保護者も利用者も笑顔になれる場を工夫されていて地域の中で必要とされていることがよくわかりました。保護者の方が自ら子どもたちのために行動に移せるような、ちょっと背中を押せるような支援を私たちも考えていけたらいいなと思いました。

さくら保育園の方は全職員の方を5つのチームに分担してその中で子どもの姿のエピソード記録を丁寧に取られて、考察をしていて年令別の保育をしながら5つのチームも並行しながら出来ているのであればすごいなと思いました。主任の先生も若くて、若い先生が意見を出されて、子どもと一緒に具体的に動いて研究、考察をされて、保育者誘導ではなく進められているところがすばらしいなと思います。こうしたいなと思うところがあれば実際に動いてみる、こうしてみたいと思うところはあるのですが、したいなでとまっているところがあるので、背中を押された気がします。

・両園ともコミュニティーや自然体験を通して、保護者との関りを深めて子どもの育ちを保護者とともに見守ったり、成長を感じるという、今とても大切にされている親育ち支援が自然とできていて、感動しました。さくら保育園で出されていた事例は全員の職員の方から事例を出してもらって名前を伏せてどれがいいか選んだ、というお話を聞かせてもらったのですが、選ばれたのが就職して2年目の保育士の事例だったそうです。子どもの年齢に近い先生が感じたことを、ベテランの保育士が感じないようなことが書かれていたという話を聞いて、若い人を育てるといふ、人間関係もすごく勉強になりました。

・発表を聞いて学ぶところも沢山ありました。私の園では別建てで地域の子育て支援センターがあるんですけど今年度やっと園庭開放をすることが出来ましたが、そこに未就園児の子どもさんも来ていて、保育園に通っている子どもたちを見て保護者の方が悩みを言われたりする姿を見て、こういう場所は必要なんだと感じることが出来ました。さくら保育園の発表では、今コロナ禍の中で保護者を巻き込んでというのは、難しい状況なんですけど、ここまで活動しているというのは、保育園として子どもたちも、先生方も楽しい保育が出来ているんじゃないかなと感じることが出来ました。勉強させていただいたことを園に持ち帰り、取り組んでいけるところは、取り組んでいきたいと思いました。

【おわりに】

・助言者より

コロナ禍の中で大変な思いをしながら保育をしている事を感じました。保育と自然の切っても切れない関係と同じで、人との関係が密になっている中で社会背景や環境が変わると共に保護者も変わる中での対応は大変なことだと思います。

今日行ったことが明日や一年後どうなっているかという事よりもそこに日々の積み重ねがあるんだと言う事を実感しています。人が大事という事はその中でコミュニケーションも重要な部分になってくるということを感じ、私も勉強させていただきました。

・司会者より

あざみの保育園のほうは、園と地域の子育て支援センターとしての取組み、その中でサポートしながらつながりを大事に、今の時代に合わせた zoom とかインスタグラムとかを通して、情報発信しながら笑顔になれる場所、自分の思いを聞いてもらえる場所として日々取り組んでいっていることをお聞きして、これからはそういうことがすごく大事だなということも実感しました。そしてさくら保育園の先生のお話では子どもをとりまく自然環境の把握から始まって、みんなで自然体験を通して子ども、保護者を含めて、みんながどう変化していったのか、好奇心や探究心などをもち色々なことに取り組んだことなど、自然体験の素晴らしさ、大切さを教えて頂きました。これから学んだこと、感じたことを園に持ち帰って明日の保育に繋げていってほしいなと思ったことでした。

・幹事より

事前の準備も大変だったと思います。皆さんで協力し合って非常に素晴らしい発表ありがとうございました。また発表が終わっても、こういった取組み、ずっと継続されていくことを願っております。これから SNS とか色々な、情報、伝達手段を使ってやっていくことを、広めていく時代となってきました。けれども1番大切なのは保育園の職員個々のやる気、個人のやる気をいかに束ねていくか、そういった園長の仕事も大事なことだと思います。

第3分科会：県民文化ホール第6多目的室

【カテゴリー4】子育て文化を育む

[研究テーマ⑥]

「食を営む力」の基礎を培う食育の推進

発表者 香川県 白方保育所 副所長 和気 愛
保育主任 柏民 由佳
所長 和気 正真 (Pc 操作)

[研究テーマ⑦]

保育の社会化に向けて
～保育の営みをいかに社会に発信するか～

発表者 愛媛県 味生保育園 保育士 越智 繭子
分室長 松田 希 (Pc 操作)

【カテゴリー5】子育て・子育てを支援する仕組みをつくる

[研究テーマ⑧]

公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割

発表者 徳島県 藍住町立中央保育所 保育主査 長江 智恵
保育主査 豊田 弘美

助言者 高知学園短期大学副学長
教授 山下 文一

司会 高知県佐川町花園保育園 園長 鍵山 普佐恵

幹事 高知市保育幼稚園課 副参事 沖 元美

記録 高知市立大津保育園 園長 山岡 美賀
高知県佐川町尾川中央保育園 園長 横畠 亜矢

【カテゴリー4】子育て文化を育む

[研究テーマ⑥]「食を営む力」の基礎を培う食育の推進

発表者 香川県 白方保育所 副所長 和氣 愛 主任保育士 柏民 由佳

<発表内容>

香川県の小さな町にある白方保育所。仏教保育を続けて50年程経っている。

これまで、食のことが話題になることがなかったが、食育発表の機会をきっかけに職員間で話し合う時間を持つことになった。人は食べることで大きくなる。身体は食べ物によって作られていることを知り、食べる時間が楽しいという記憶がのこってほしい。保育士からは、食べるのが楽しいと思ってほしい。所長からは、安心・安全な食の提供を目指すため、給食を見直す。人との関わりの中で、子どもは育つということを中心に食を通じて、生産者と触れ合う機会をつくっていききたいという意見が出た。立ち位置は違うが、思いや考えは近いこともあり、さらに話し合いながら食の取り組みを始めた。

食育イベントは楽しく、子どもの記憶として残っていくが、はたして食育とは、イベントだけを指すものなのか、日々の中にあるものなのではないか、シンプルに積み重ねていけるものなのではないかと再度見つめなおすことにした。

3年間取り組んできた中で、職員の食へ対する考え方も変化し、新たに食育の方針として「有難い」「勿体ない」「お蔭様」を掲げた。食を営む力とは、生きることそのもので、命を大切にすること、この3つの言葉に全てが詰まっていることに気づいた。

これからの取り組みについて、食を通じて、大人も子どもも人と人がつながることを大切に子どもの幸せを願って安全な給食を提供していきたい。いろいろな職種から何を大切にしていきたいか伝え合い、取り組んでいきたい。

《小グループに分かれて意見交流をする》

助言者 高知学園短期大学副学長 山下文一教授より

～白方保育所の発表より～

食育はイベントになってしまうことがある。具体的に何をしていきたいか、園でしっかり論議されている。それぞれの立場で育てたい力がみえてきた。

人に興味を持つということ、育てたい食の力を地域と一緒に企画している。例えば、芋のつるを植えた時、育てていく過程から興味をもてるように、写真を撮るなどして育てていった子どもたちは、芋の収穫の時、大事に芋を抜こうとする。育ちを経験していない子は、真ん中から鍬を入れて芋を傷つけてしまう。

また、家庭に知らせることも大事。園から日々の取り組みを地域を巻き込んで発信していく。

食を通じた保育所機能の開放、食に関する相談、援助の実施、食を通じた子育て支援の交流の場の提供及び交流の促進、地域の子育て活動に関する情報の提供が食を営む力につながっている。

[研究テーマ⑦]

保育の社会化に向けて ～保育の営みをいかに社会に発信するか～

発表者 愛媛県 味生保育園 保育士 越智 繭子

<発表内容>

松山市の北部にある味生保育園の分室として「味生子ども・子育て施設」が開設した。待機児童数削減対策や小学校との連携を図ることを目的に味生小学校北校舎で事業を行っている。

味生保育園分室には、一般保育、一時預かり、地域子育て支援センター、親子教室があり、「こどもはみんなで育てよう！ひとりじゃないよ」という共通の目指す子育て支援像をもち、地域に開かれた分室として取り組んでいる。

・地域子育て支援センター

市内に16か所ある。月曜日から金曜日まで毎日開放している。

地域の集会所を借りて出張子育て広場も実施している。ボランティアの協力会員が30名登録されており、その中の2、3名がお手伝いに来てくれることになっている。兄弟をつれてきていた母親に「赤ちゃんをみているから、お兄ちゃんと遊んであげて」など、参加者を優しく見守ってくれることで、地域の人とのつながりを感じることができる機会になっている。

子育て講座では、託児室で子どもを預かり、保護者の育児に対する不安やストレスを吐き出す場となっている。

・親子教室

子どもの発達や育児に不安のある家庭が親子で通園している。個別支援計画作成し、発達を促していけるように支援し、保護者の育児不安を解消している。就園先に個別支援計画を渡すことで、スムーズな園生活につなげていけるようにしている。

今後も地域の保育園として地域貢献していくことを目指していきたい。

《小グループにわかれて意見交流をする》

助言者 高知学園短期大学副学長 山下文一教授より

～味生保育園の発表より～

保育・教育の目標や方針がある。自園では、どうか、情報交換が必要。園として目当てや目的がないといけない。こういう力が育ってほしいという思いが大事。

41 地域の教育力をどう巻き込んでいくか。どこにつながっていくのか。どういった人材がいるのか。こういう子どもに育ててほしい。国の考えや思い等を伝える。ただ、保育園で遊んでいるだけではなく、そこにはいろいろな育ちがあるということをホームページやお便りを活用して発信していくことが大事。保護者が保育士体験することも自分の子育てを見直すきっかけになり、双方向のやりとりで保護者との信頼を深めることにもつながる。

【カテゴリー5】子育て・子育てを支援する仕組みをつくる

[研究テーマ⑧]

健やかにのびのびと過ごせる場所をめざして ～一人一人を大切にする保育～
発表者 愛媛県藍住町中央保育所 保育主査 長江 智恵・ 豊田 弘美

藍住町唯一の公立保育所である。

めざす子ども像である「元気に活動する子ども」「友達と仲良く遊ぶ子ども」「自分の思いを素直に表現する子ども」へと健やかに育てていくためにはどのような環境や保育者の関わりが必要か研究していく。

研究を通して、職員間で日々の保育を振り返り子どもに対する理解や関わり方が大切だと再確認した。このことが「一人一人を大切にする保育」となり、子どもにとって保育所が『健やかにのびのびと過ごせる場所』へとつながっていった。子ども・職員数とも縮小していくなか、役割を担っていくことの難しさも感じる。公的な専門機関・地域の専門的施設など、協力しながら進めていく必要がある。めざす子ども像の実現へと取り組んでいき、子育て家庭や地域社会に対し、子育て支援及び地域連携を行っていきたい。

《小グループにわかれて意見交流をする》

助言者 高知学園短期大学副学 山下 文一教授より

～藍住町立中央保育所の発表より～

子どものよさ実態・地域の保護者の教育及び保育のニーズをリサーチする。

- ・改善 なぜ何をいつまでにどのように改善するのか。その効果は？
- ・プラン どういう子ども達に育てて欲しいか（目標）育てたい資質（能力）目標達成に向けて、保育をデザインする（計画）
- ・評価 目標に対する達成感
多面的な角度からの評価（保育・地域のかかわり）
- ・実行 計画に基づいて実行

子どもは遊ぶ事を通して楽しく、そして思い切り遊ぶことで、目標がスローガンにとどまっていたり、具体的な達成目標をもていなかったり不明確ではなかったか。感覚ではなく共通的に理解していく事が大切、見えないものを評価し悪い所を出していくのではなく、保護者に対して一年間育ててきた事を伝えていく。家庭に協力してもらいたい事を伝える。親が働くために預かっている施設ではなく、子どもが出会う大切な場所であることを伝えていき、評価を意識していく。また、評価を行い評価結果を開示する事のみにとらわれてなかったか、継続的に改善していくためにどのようにしていくか、所長・園長など、一部の職員による評価となっていたのではないか、園が変化に対応した力のある園づくりを行うために、組織としての力が必要である。保護者・地域を巻き込んでいき、職域に関わってくる、組織体として力を発揮し改善に取り組み、方向性をしっかりしながら取り組んでいき、行き先に迷っている時には行き先や目標を定めていきたい。

<分科会の全体まとめ>

助言者 高知学園短期大学副学 山下 文一教授より

子どもと保護者が豊かな生活が表現できるようにするために、保育ソーシャルワークが必要。支援を必要としている人を力のない人と見るのではなく、何らかの事情があって力を発揮できない人だと考える。

ケースを発見した場合、まずは、インタビュー（面談）、そしてアセスメント（事前評価）、次にプランニング（計画）、次は、インターベーション（支援実施）、その後モニタリング（事後評価）、ターミネーション（支援終了）の流れが大切である。

<アンケートまとめ>

- * 感染対策で気になった点 第三分科会県民文化ホール第 6 多目的室での食事がとても密になっていた。食品持ち込みの方が多かったため。
- * 保育施設の運営には保護者・地域・行政の協力が必要だが、他の施設の取り組みについて知ること、自施設を見直すきっかけができた。すべきことは、施設ごとになるので、自施設に必要なことを取り込んで、より良い運営に役立てていきたい。
- * どの園でも地域性や置かれている環境を生かして保育を行っていると感じた。社会の中で保育現場に求められていることは多様だが、目の前にいる子供に何をすることができるのか探求していくことが大切だと感じた。
- * 本市では、メニュー変更は栄養士のもとでと言われているので、栄養士のいない当園では、食育活動もよくやっているが、リアルタイムに感動の中で食べられないのが残念だ。栄養士がいることがうらやましい。
- * 各保育園での日々の保育の取り組みがとてもすばらしいと感じた。
- * 地域との協力した保育がとても印象に残った。
- * 食育はイベントではないと助言の山下先生が言われたが、本当にその通りだと思う。イベントは目の前で行われることへの驚きなど子どもの感性を刺激するが、いったい何が目的であったのか十分話し合えていなかったり、イベントをするだけで終わったりするようなことになりかねない。
- * 食は毎日の生活の中で、その子ども達一人一人の為に、どの職員の立場から、また、地域を巻き込みながらの食への興味関心を持たせ、食が基本であることをしっかりと認識していくことが大切だと思った。
- * 支援センターやそれぞれの講座などを通して、横のつながりをしっかり持つことと目的・目標を持つことで地域の連携が生きてくると思った。
- * どういう子どもに育ってもらいたいのか…これがまん中に子ども像としてあることが大切。あたりまえだけど忘れがちになる。
- * 子ども同士だけでなく、大人も子どもと一緒に育ちあうことに気づけたらよいと思う。

記念講演

○講 師：中村学園大学 教授 那須 信樹

演 題 「保育の質を高めるチームであるために」

演題：保育の質を高めるチームであるために

～『保育所における自己評価ガイドラインハンドブック』の活用を通して～

講師：中村学園大学 教授 那須 伸樹 氏

今大会の記念講演は、各分科会終了後再びグリーンホールに集合する形で始まり、講演の本題に入る前に、導入として園庭の高い場所にトウモロコシを吊り下げているスライド写真が提示された。「一体この写真は何だと思えますか？」との問いかけがあり各々が考えていましたが、答えは「ポップコーンを作ろうとしていた。」というものであった。「トウモロコシからポップコーンを作るにはどうしたら良いのだろうか？」「お日様に近い場所に置くとポップコーンができるかもしれないから、トウモロコシをぶら下げたい。」という4歳の男児の願望や疑問、発想からの写真だったが、普通に考えるとこんなことをしてもポップコーンができるわけがありません。しかし、それは大人の考えであり、この担任は男児の考えを否定することなく一緒になって考え試してみたのです。このことから子どもという存在をどのように捉えているのかによって、私たち保育者は子どもへの接し方が変わってくるということに繋がっているのです。

本日のキーワードは、『おもしろがらしましょう。』ということ。子どもたちの存在、そして日々を織りなす保育の営みをおもしろがってみませんか？そこで、本日の学びのポイントとなる、子どものおもしろいをおもしろがるための職員間の「関係の質」の向上をマネジメントする必要性が最近指摘されていることが挙げられた。

“保育の質” “職員間の関係性の質” “働きやすさ” はみんなで生み出していくものである。関係の質が良くなれば、そこで考えられる思考の質も高くなる。思考の質が変われば行動の質が変わる。行動の質が変われば当然結果の質も変わる。結果の質が良くなればさらに関係の質は良くなる。(ダニエルキムが「組織の成功循環モデル」として提示している)それを共通の言葉、保育園においては保育所保育指針のなかでいかに捉えていくか、そして捉えるだけでなくいかに実践していくかということが大事。

また、もう一つの大事な枠組みとして、チームのパフォーマンスを向上させる二つの視点が指摘されている。一つは保育の質の向上。もう一つは人間関係づくりですが、質の向上を支えるためには職員の関係性が大きな意味を持っているということをおさえておいた上で、人間関係づくりよりなくてはならないのは信頼関係であり、両方のプロセスへの支援をバランスよく行うことでチームのパフォーマンスが向上する見方ができるのではないか。関係性を豊かなものにしていこうと職員一人ひとりが思いながら、それを少しでも行動に移す。そのなかでタスクが実現できるようなチームを作っていこうとする意識を調整していかないといけない。

そして次に、「保育をもっと楽しく！」をマネジメントするために『保育所における自己評価ガイドラインハンドブック』を紐解きながら、活用のポイントをお話ししていただい

た。

マネジメントというと管理職に携わる職員はよく聞く言葉だと思うが、それは経営的なところのマネジメントであり、本講演に関しては保育内容等に係る運営的なところのマネジメントとして考え、保育者のキャリアアップ研修の研修分野の一つにもマネジメントがあるように、今は管理職だけ知っておけば良いことではなく新任者を始めみんなが知っておく必要があるのです。

『自己評価という言葉にどのようなイメージを持っているか?』ということに対しては、管理職は自園の弱みや強みを明らかにし次の保育実践をより豊かなものにするために改善の為の手立てとして位置付けている場合が多い。一方、クラス担任等のほうは、誰かと比較されている。点数化されている。「できたかできなかった」で見られている等、職員はネガティブな印象を持っていることが多い。評価という言葉がネガティブなイメージを想起させるのであれば振り返るという言葉に置き換えても良いが、評価というものは未来の保育実践を考えるためのものであり、日々の保育実践の意味を考え、次のより良い実践へと繋げていくために行うものである。と示されています。故に評価とは、改善して次に繋げるものという認識を今一度我々は新たにしていける必要があるのではないか、ということでした。

自己評価の実施に当たって大切にしたいことについては、①自己評価の基盤となる「子どもの理解」②日々の保育に手応えが生まれ、保育がより楽しくなる評価にする③互いに肯定的な理解と評価ができる職場の環境づくりの3つのポイントが挙げられ、また取組を進めていく際には、記録・計画を通した視点や理解の共有、話し合いの場や時間を確保し、会議やミーティングを工夫する、既存の評価項目を用いる際の留意点と工夫、園長・主任の役割、保護者や地域との連携、園内研修や外部研修や評価などの活用をしていくポイントを話された。

”保育の質” “職員の関係性の質” ”働きやすさ” は、みんなで生み出していくものであり、関係・思考・行動・結果のそれぞれの質が循環しながらチームの関係性を豊かにしていくことが望ましいこと。結果の質において「できたか・できなかった」だけに関心を向けるのではなく「何が、どのように変化したのか」ということに関心の目を向けることが大切であるということ。また、未来の保育者育成における取り組みについて、養成校の立場からの視点でも話があり、養成校における教育の充実を図るためにも、保育現場との協働（実習受け入れ、就職等）をめざし、開かれた関係性を紡いでいくことが大切であることがわかった。

最後に、保育士等の自己評価だけでなくそれを踏まえて保育所（組織）による自己評価や多様な視点を取り入れ活用する取り組みを同時に充実させながら、日々の保育のなかで双方向的対話を心掛け相互理解を深め、肯定的な評価や理解がし合える職場づくりをしていくことや、自分自身をアップデートさせ、変化し続けることでさらなる保育の質を向上したいと改めて思った。

令和4年度四国ブロック保育研究大会分科会テーマ及び役割分担表

作成(改定) 2022年7月4日

■大会総合管理 東秦泉寺保育園 園長 立石 由香

総合司会 江ノ口保育園 園長 刈谷 緑

分科会	会場	カテゴリー	研究テーマ	担当県名	全国大会	発表者	助言者	司会各1名	幹事各1名	記録各2名	受付各2名
1	高知会館(白鳳)	1	①新たな時代の保育実践 ～すべての子どもにむけて～	高知		高知市立 秦中央保育園 保育士 桑名 白貴	高知大学 教授 川俣 美砂子	高知市保育幼稚園 課 管理主幹保育担当 係長 津田 志保子	高知市 朝倉中央保育園 園長 岸本 章子	高知市立愛善保育園 園長 明神 望	高知市立春野西保育園 園長 地引 香
			②配慮を必要とする子どもや家庭への 支援にむけて	香川	白樺保育園 主任保育士 八十岡 美智子 (保育士 佐藤 千賀) 事務長 白石 真希Pc操作	朝倉中央保育園 主任 吉良 和恵				朝倉中央保育園 保育士 五十嵐 光	
			③保育者の資質向上を図る	愛媛	みしま乳児保育園 副園長清水志津子 Tリーグ-吉元リエ Pc操作						
2	高知会館(飛鳥)	2	④地域の子育て家庭への支援の 充実にむけて	高知		あざみの保育園 副園長 山本 由美 子育て支援担当 野口 笑美 子育て支援担当 山本 美智	高知学園短期大学 幼児保育学科長 教授 後田 紀子	高知市 十津保育園 園長 森本 佐和	高知市 ひなぎく保育園 園長 山崎雄一郎 (こうちまち保育園) (園長 宮 恭子)	十津保育園 主任 中川 夏恵	十津保育園 保育士 高橋 香織
		3	⑤子どものより良い育ちにむけた関 係機関とのネットワーク	徳島	さくら保育園 主任保育士 一柳 諭史 主任保育士 森本 結香 保育士 唐谷 絵里衣	城南保育園 保育士 小川 和紗 (こうちまち保育園) (主任 吉良 佳晃)				ひなぎく保育園 保育士 森下 香織 (こうちまち保育園) (保育士 岡林 恵)	
3	文化ホール第6多目的室	4	⑥「食を営む力」の基礎を培う食育の推進	香川		白方保育所 副所長 和気 愛 保育主任 柏民 由佳 所長 和気 正真Pc操作	高知学園短期大学 副学長 教授 山下 文一	花園保育園 園長 鍵山 普佐恵	高知市 保育幼稚園課 沖 元美	高知市立大津保育園 園長 山岡 美賀	高知市立河ノ瀬保育園 園長 種田 幸子
			⑦保育の社会化にむけて ～保育の営みをいかに社会に発信す るか～	愛媛	味生保育園 保育士 越智 繭子 分室長 松田 希Pc操作	尾川中央保育園 園長 横島 亜矢				一ツ橋保育園 副園長 大黒 慎一郎 (斗賀野中央保育園) (園長 中村 容子)	
		5	⑧公立保育所・公立認定こども園等 の使命と地域社会での役割	徳島	愛媛	藍住町立中央保育所 保育主査 長江 智恵 保育主査 豊田 弘美					

※参加申込総人数：192名

※分科会会場 (高知会館(白鳳)：第1分科会C1 89名、高知会館(飛鳥)：第2分科会 C2・3 54名、県民文化ホール第6多目的室：第3分科会 C4・5 49名 分科会無記名4名は第：

※全体会(グリーンホール) 舞台裏関係：大黒(一ツ橋保育園)、田ノ内(城南保育園) ※全体会記録：刈谷・西本(江ノ口保育園)